

II 研究主題への取り組み

本校では教育目標を、「楽しい学校生活の中で、その力を精一杯伸ばし、働くことに喜びを持ち、社会の一員として生きる人間を育成する」と設定している。つまり、最終的には「社会的自立」をめざし、障害の程度に応じて、自立することがそのねらいである。このことは、本校創設当時から一貫してめざしている目標であり、それに向かって努力を積み重ねてきた。

しかし、児童生徒の思いや気持ち、一人ひとりが時間をかけ、ねばり強く目標に立ち向かっていく主体的な姿、その目標に到達したときの喜びに満ちた笑顔の大切さといった、「社会的自立」への過程における子どもたちの情意的な面へのアプローチを、軽視していたのではないかという声があがってきた。

また、障害児を取り巻く社会情勢をみると、「Quality Of Life（生活の質の向上）」という一人ひとりが自分なりに、いかに質の高い豊かな生活を実現し楽しむかという考え方がクローズアップされてきている。さらに、学習指導要領でも、「個性を生かす教育の充実に努める」ことが強調されている。

こうした背景を受けて、われわれも、子どもたちの「社会的自立」に向けたよりよい姿を求めて研究を実践していきたいと考えた。

1 研究主題設定の趣旨

本校児童生徒の実態を振り返ってみたとき、人に言われたり、課題や場を設定されたりしたなかで、楽しんでいる活動がほとんどであることが明らかにされてきた。活動を楽しみ、自ら目標を持ったり、自分なりの考え方ややり方で、粘り強く課題に立ち向かっていく。その課題をクリアしたとき、満足感や成就感を持つ。そのやり抜いた喜びが次の活動のエネルギーとなり、次の課題に立ち向かっていく。このような姿を本校の児童生徒に求めていきたいと考えた。主体的に自らの生活を切り開いていくことができるこの姿こそ、われわれが求める子どもたちの姿であり、現在から将来にわたって「生活を楽しむ子」であると考えた。そこで、研究主題を「生活を楽しむ子」とし、研究を進めていくことにした。具体的な姿は、

- ① 自主的に、自ら求めていく
- ② パターン化したものではなく、いろいろなものに挑戦し、楽しみを拡げていく
- ③ ひとりだけで楽しむのではなく、仲間とともに楽しむ
- ④ 自己の楽しい活動に対して、達成感や成就感を持つ
- ⑤ 楽しんだ活動が、次の楽しい活動の力となる

という姿であり、このような学校生活を過ごすことによって、将来、社会に出てからの生活の中でも、われわれがめざす将来像は、

- ・健康で（病気と上手につき合うことも含めて）
- ・生活のリズムが整っていて
- ・働く場を持つことで社会参加をし、自分の持つ力を出し切り

- ・人と関わりがあり
 - ・自分なりにしたいこと楽しみやいきがいがあり、余暇を有意義に利用できる
- に近づいていけるものと考えた。

2 研究の構想

この研究では、「生活を楽しむ子」を育てていくことをめざして進めていく。「生活を楽しむ子」というのは、好きなものや自分が使う道具、さらには生き方などさまざまなものを自分で選んだり、段取りや筋道・周囲の状況を判断したりしながら、目標を持って主体的に活動し、できたことに達成感や成就感を持つ子である。発達段階や生活の年齢などによってそのやり方は異なるが、選んだり判断したり考えたりする「思考の過程」を重視していきたいと考えている。

そこで、「自己活動」、「思考の過程」、「達成感・成就感」という視点で研究を進めていくことになった。

研究の場として、各学部の教育課程における授業の場を考え、授業づくりを中心に組み立てていこうとした。この授業づくりの中では、「自己活動」、「思考の過程」、「達成感・成就感」が実現されるような題材を選定し、教師の支援を工夫していく。そこで、授業づくりをしていく際のアプローチの方向として副題を「題材の選定と支援の工夫」とし、その側面から研究に切り込んでいくことにした。

ここで本研究推進にあたって使用した用語について、説明を加えておきたい。

自己活動と思考の過程の重視

本校の教育課程の中で、生活単元学習や作業学習の占める比重は大きい。その生活・作業教育論に関して、荒川智は、「新教育運動における『生活』『作業』と障害児教育」のなかで、生活・作業教育論の基本的な生活として、「第1に、子どもの自己活動を基本にしていることである。子どもを受動的な存在としてみなし、不毛な知識を注入していくのではなく、生活実践の中で子どもが興味・関心を持ち、必要に感じたことを学習内容として組織していく」「第2に、子ども自身の思考の過程を重視していることである。思考の過程を重視していけば、学習の系統性と分化を必然的に求めていくこととなる。もちろんそれは実生活と切り離されたものではない」（障害児問題研究 第21巻第3号 P 220）と述べている。われわれは、この考え方を取り入れていった。

「自己活動」とは、児童生徒の主体的な活動を指す。「思考の過程」の「思考」とは、周囲の状況を判断しながら、好きなものや自分が使う道具、さらには自分のやり方などさまざまなものを選択したり、段取りや筋道を考えたりすることであり、その選んだり考えたりする過程を「思考の過程」と考えた。

達成感・成就感

児童生徒が、自分たちのまわりにある事象に興味・関心を持ち、「やってみたい、やりたい」と挑戦し、自ら目標を決めて取り組み、成功したり自分の目標を達成した

とき、大きな喜びを持つ。その達成感や成就感が自信となり、次の活動を生み出すエネルギーになっていく。授業づくりの中でも、次の活動に発展させていくような意欲や達成感・成就感を大切にしていきたい。

支援

広義には、支援を、子どもの自主性を大切にし、子どもに寄り添い教師の立場で見守りながら、必要な手助けをするものであると考えた。つまり、その子なりの生き方・考え方・やり方を大切にし、学校生活や、将来的には社会の中にその子のよさが生き、そのままの姿でその子として生きていけるように、応援していくことである。

一方、狭義には、授業づくりの中の、教師の児童生徒に対する姿勢や学習活動の具体的な援助・手だてをいう。

「自己活動」や「思考の過程の重視」については、今までの研究の成果である「自分づくり」の考え方を継承しながら、さらに追求していきたい。

自分づくり

平成 4～6年度の「発達と障害に応じた教育をめざして — コミュニケーションに視点をあてて —」の研究のなかで、児童生徒の内面を把握しようとして「自分づくり」の段階を考えてきた。その段階とは、1歳半の「自我の誕生」から、「自制心の芽生え・形成」、9歳の「自己客観視」の段階である。（詳しくは、本校紀要15集 P 10参照）

「自分づくり」についてのこうした考え方は、この「生活を楽しむ子」の研究でも①児童生徒の実態把握 ②児童生徒をできるだけ多面的に把握し、思考の過程の裏付けとする ③めざす「生活を楽しむ子」像を明確にし、個人目標を設定する ④よりよい支援をする ⑤評価の裏付けなどに利用していきたい。

3 取り組み

研究への取り組みは、発達段階と生活年齢との両面から作り上げた各学部のテーマに基づいて、各学部での実践を中心に行なってきた。さらに、各学部の取り組みの連関を図るよう、一つの切り口での実践を検討した。ここでいう連関とは、3学部の研究の内容が一定の関係に従って結合し、全体の研究を構成していくことを意味する。各学部の詳しい実践については、P13 からの各学部の実践で述べる。ここでは、主に各学部の連関について述べていきたい。

(1) 各学部のテーマ

取り組みの方向やめざす児童生徒像を示すために、生活年齢と発達年齢の両面を考慮しながら、各学部のテーマを設定した。

小学部	興味を持ちながら、いきいきと活動する子
中学部	自分なりのめあてを持って、自らの活動を楽しむ子
高等部	自分の考えを持ち、活動のなかに喜びをみいだす生徒

小学部のテーマは、興味の対象が狭く、なかなか楽しみきれない児童の興味の対象を少しずつ広げながら、学校生活の中で喜びを持っていきいきと活動する子どもを、中学部のテーマは、自分自身が生活の主体者となれるように自分なりのめあてを持って取り組み、その活動を楽しむ子を、高等部のテーマは、自分の意思や考えを持って主体的に活動に取り組むことによって、先を見通して、活動の中に喜びをより多くみいだす生徒を、それぞれ育成していききたいという願いがこめられている。

(2) 各学部のねらい

各学部が、研究の構想のなかで述べた研究の視点「自己活動」「思考の過程」「達成感・成就感」を、テーマに沿って、どのようにとらえ、何をねらっているのかを以下の表にまとめた。

	小学部	中学部	高等部
自分づくりの段階	自我の誕生・拡大・充実 自制心の芽生え 自制心の形成	自己客観視の芽生え	自己客観視
自己活動と思考の過程	<ul style="list-style-type: none"> 簡単な選択をし、自分なりの考えを持つ 自分から活動に取り組む 集中して取り組む 自分なりの方法で成し遂げる 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の考えを持つと同時に友だちの意見も聞く 自己決定し、決定したことを最後までやり遂げる 新しいことに挑戦する 失敗を恐れず、何にでも挑戦する意欲を持つ 	<ul style="list-style-type: none"> 人の意見を取り入れながら自分の考えを持つ 自己認識に基づいた思考をしていく 自己決定したことに、見通しをもって取り組む
達成感・成就感	<ul style="list-style-type: none"> いきいきと取り組み、思う存分自分なりの考えで活動しきる 先生や友だちとできたことを喜び、楽しさを共感し合う つまづきながらも乗り越え、自分でできた成功体験を味わう 	<ul style="list-style-type: none"> 自分で考え、主体的に活動する 友だちと協力し、一つのことを成し遂げる 失敗しても、あきらめずに成功につなげる 	<ul style="list-style-type: none"> 目的意識を持ちながら最後までやり遂げ、できばえを自分なりに評価して、達成感・成就感を持つ

(3) 各学部の連関

各学部のねらいを基に実践を行ってきたが、その際の基本的な考えや実践場面さらに、題材の選定と支援の工夫についての各学部の連関を次のようにまとめた。

	小学部	中学部	高等部
基本的な考え方	<ul style="list-style-type: none"> 一人ひとりの個性や考え方でできるだけ寄り添い、今を充実して生きることを大切にする 成功感、成就感のある活動を積み重ね、自信につなげる みだてつもり活動やごっこ遊びのなかでやってみる 楽しみを育て、教えていく。みんなで楽しむ経験をする中で、楽しめる活動の種類を増やしていく 	<ul style="list-style-type: none"> 一人ひとりの個性を大切にすると共に、それが生きる学級や仲間づくりを重視する 生徒の思考が発展的につながるような題材を選定する 生徒が今よりも少し高い目標を持ち、失敗が次の意欲や成功につながるような支援の工夫を工夫する 自分の持っている力を出し切り実生活に近いことを経験する 自分が楽しめるものを増やし、それを友だち同士で楽しむ 	<ul style="list-style-type: none"> 青年期にある一人ひとりの生徒の内面にも目を向けて、個性をより深くとらえる 思考の揺れを大切にしながら、生徒が自分の考えを持つことを重視する 主体的に活動に取り組むための支援を工夫し、積極性や自信につなげる 社会参加を意識して、実生活に生きる内容ややり方を身につけていくようにする その子なりの楽しみ方を増やしたり見つけたりする
研究領域 教科	生活単元学習	音楽科・体育科 生活単元学習（行事単元） 書くこと（課題・生活単元 他）	生活一般・選択学習 特別活動（学部集会、 ホームルーム活動） 職業科
題材の選定	<ul style="list-style-type: none"> 生活に密着したもの 好きなこと、できること 興味関心のあるもの 季節感あふれるもの 自由性に富み、個性が生かせるもの 繰り返し経験するもの 	<ul style="list-style-type: none"> 生活に生かし使えるもので、今までの経験や学習が生かせ、新しく世界を拡げていくことができるもの 中学生らしく、ダイナミックに身体を使うことができること 友だちと一緒にすることによって、深まるもの 	<ul style="list-style-type: none"> 社会生活に近い経験ができるもの、また実際に社会生活のなかで応用できるもの 発達年齢を考慮しながらも、大人になりつつある青年期の心や身体の発達を題材にした内容のもの 社会生活をする上で、いろいろな人との関わりがもてるもの
教師の支援	<ul style="list-style-type: none"> 本人なりの考え方や個性を尊重する 自然に生じるつまずきや葛藤場面を大切にしながら、成功に終わるための状況づくりをする 自己活動を促す題材を準備する 見通しを持ちやすい場の設定や教材作りをする 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の考えや個性を尊重する 葛藤する場をつくり、生徒の考えを拡げたり深めたりする 失敗で終わらないよう成功につながる教材を工夫する 直接手を出すことは極力控え、個に応じた教材・教具を選ぶ 	<ul style="list-style-type: none"> 青年期にある生徒たちの人格を尊重する 本人からの動きをじっくり待つ 葛藤場面に出会った時、その子なりの方向を見つけていくことを待ったり助言したりする その子なりに納得して満足感の得られるような題材や教材を準備する

(4) 各学部の連関を図ろうとした実践事例

—「作る」授業実践をとおして—

本年度は、各学部の取り組みを中心として研究を進めながら、各学部の一貫性を追求するために、もう一つの切り口として、「作る」という授業に取り組んだ。ここでいう「作る」というのは、「制作」や「製作」といった具体的な形あるものを作ることであり、「ぬたくり」のような素地づくりも含めて考えていった。

① 「作る」の授業と「生活を楽しむ子」との関係

菅沼嘉弘は「造形活動は、自発的・能動的活動であり、試行錯誤の過程である」（「子どもと手仕事」P194より引用）と述べている。また、「一つのもので出来上がるまでの思考の流れはそうとうなものであり…、頭のなかはいろいろな考えで満ちており、心は躍動しているのである」とし、さらに「イメージした“もの”を、思考を働かせ、工夫を凝らしながら、次第に実現していく、そこに見えてくる知的世界の拡がり、それは科学的思考の芽生えと呼ぶにふさわしいものである。作ること、それが人間同士の“協同”を生み出してきた。人と人とが、ものを作ることを通して、教え合い、伝え合い、つながり合う喜びを獲得していく」（同P3より引用）とも述べている。この考え方は、造形活動のみにとどまらず、本校で行なった「ぬたくり」などの素地づくりから高等部の「製品づくり」に至るまでの「作る」という活動の考え方と一致する。

このように「作る」という活動は、研究テーマ「生活を楽しむ子」の視点である「自己活動・思考の過程」が取り入れやすく、その上、「達成感や成就感」が得やすいと考え、「作る」という切り口で各学部の連関を見ることにした。

② 方法

小学部・中学部・高等部が各1回、研究授業を行い、その授業を基に研究会を行う。

③ 実践

小学部の「ぬたくり」の実践〔1組〕（遊びとしての活動）

中学部の附養文化祭での劇「花さき山」の小道具作りの実践〔八郎グループ〕

（作ったものを使う・生活に生かす物作り）、

高等部の「自分で決めた作品を作ろう」〔選択学習 木工芸コース〕

（自分が使うかまたは大切な人にプレゼントをする作品作り）

の授業が行われた。以下各学部の授業を比較して表にまとめた。

	小学部	中学部	高等部
教科領域 指導の形態 单元名	生活単元学習 「はだかであそぼう」	生活単元学習 「附養文化祭」	選択学習・木工芸コース 「自分で決めた作品を作ろう」
学習グループ 人数	小学部1組 4名	劇中のグループ 8名	木工芸コース 3名
題材	・ぬたくり(絵の具)ペインティング 紵ペインティング スポンジ	・劇に使う小道具(石)と衣装 (波)作り	・ファミコンケース、踏み台、 椅子作り (個別)
題材の ねらい	・自由に、思い切り遊ぶ ・教師や友だちと関わりながら 楽しみを共感し合う ・造形活動の素地づくりをする	・イメージしたり、工夫したり して、道具や衣装を作る ・劇中の役になりきるために、 衣装や小道具を作る	・自分が作りたい作品に試行錯誤 しながら没頭して取り組み 充実感を味わう ・木工の技能を習得する
児童生徒に 望む 具体的な姿	・自分でしたいことを見つけ、 全身を使って思い切り楽しむ ・教師や友だちとの関わりを楽 しみながら遊び方を広げる ・絵の具、水などの感触を楽し しみ、その素材に親しみながら 遊ぶ	・劇の内容にそったもの(重たい 石・大きな石・波)をイメ ージして作る ・でき上がりの丈夫さ、使いよ さを考えて作り方を工夫する ・劇の中で、小道具を使ったり 衣装を着たりして役になるこ とを考えながら作る	・木材加工の基礎的な技術を身 につける ・道具を安全に正しく使う ・設計図や見本を見て完成時の イメージを持ち、でき上がり を楽しみにしながら活動に取 り組む ・完成時の成就感を味わう
支援の 工夫	・教師も一緒に遊ぶ ・思い切り遊べる環境を作る ・気持ち等を代弁することで、 共感していく ・いろいろな道具に親しめるよ うに、使い方を示す ・はけ、スポンジ、ローラーな どの用具を整える	・生徒同士が教え合ったり助け 合ったりする場を設定する ・劇の内容にそったイメージが 持てるように言葉かけをする ・作り方の工夫ができるよう に見本を提示する ・めあてを作り、自己反省につ なげる	・見本の提示(完成見本や加工 部品)をする ・技術を伝授していく ・安全に対する配慮をする ・試行錯誤を大切にすることに 見守って待つ ・個によって、直接的な援助や 指示をする
授業の 評価 及び反省	・児童に望む姿が見られたが、 一人遊びに集中して遊びが拡 がらない児童もいた ・自我の誕生、拡大、充実を意 識した取り組みだった ・自分づくりの段階における幅 のある集団での一人ひとりに 応じた支援が必要である ・造形活動の素地として、個に 応じた色や形の気づきを促す ため支援も考慮したい ・遊びと生活のけじめやルール をどう指導していくか考えて いきたい	・他者が使うのではなく自分が 使う石や衣装を作るという思 いを持って、活動をしていた ・自分のイメージと実用性との 間で葛藤していた生徒がいた が、この生徒にとっては、大 切な場であった ・支援はしたが不十分で、個人 差が大きく、特に波の衣装は 工夫したりイメージしたりす ることが難しい生徒がいた	・試行錯誤しながらよりよい作 品に仕上げているとしたり 出来ばえを自分の目で確かめ て、やり直すかどうか自分で 決定したりした。このことは 自分づくりにつながっていく と考えられる ・道具を安全に使った ・完成に近い作品ができて、満 足感を味わっていた ・完成度の高い作品の要求と、 最近接領域での題材の選定と の兼ね合いを考える必要があ る

⑤ 考察と反省

「作る」という切り口で、授業づくりの小学部、中学部、高等部の流れを検証してきた。この3学部の研究授業は学部の特徴が表れており、生活年齢や発達年齢に応じた題材の選定や個別の配慮がなされていた。全学年を通した12年間の一貫性をきめ細かく追求していくわけにはいかなかったが、学部の実態や生活年齢を大切に「題材の選定や支援の工夫」の大まかな流れについて考えていくことができた。

この「作る」の授業を、研究の視点で見ると、次のような姿が見られた。

- どの授業でも、自ら楽しんでぬたくりをしたり、主体的に「作る」活動に取り組んでいる姿がたくさん見られた。（自己活動）
- 小学部での教師の遊びを模倣したり次の遊びを探したりする姿、中学部での劇にふさわしいイメージの道具や衣装を工夫する姿、高等部での本物の工具や機械を使って実用度の高い完成品を作り上げようと思える姿などが見られた。（思考の過程）
- 小学部では、遊びきった喜びを身体全体で表し、高等部では、完成品に近いものを作り満足そうにしていた。中学部の授業では、時間内に道具や衣装が完成することはできなかつたが、完成の見通しを持つことができた。（達成感・成就感）

「作る」の3つの研究授業から、小学部、中学部、高等部と学部が進むにつれて、まず、「自分のために」次には「自分を含めた仲間とともに、また仲間のために」さらに進むと、「社会に目をむけながら」思考する基盤となる対象や活動が広がっている。これは、将来の社会的自立に向けてだんだんと生活が広がっていく過程であり、各学部のつながりであると考えられる。

どの授業でも、本時の目標にそった活動をしきるためにきめ細やかな支援を行っていた。しかし、中学部の授業のなかでの「個に応じた、波のイメージを持つため」の支援や小学部の授業のなかでの「色や形に気づいていくため」の支援等、生活経験・生活年齢・発達年齢を考慮した支援について、さらに考える必要もある。

また、題材の選定に関しては、高等部で、よりよいものを作る経験をねらうのか、それとも今持っている力を使って自分で「作る」のかという最近接領域に関わる討議もなされた。いずれの経験も大切ではあるが、まだまだ、討議を重ね、共通理解していく必要があると考えられる。

（倉真理子）